



果樹（ナシ、カキ、リンゴ、ブドウなど）の果実を加害する チャバネアオカメムシの発生量が多いと予想されています 今後、果樹園への飛来に十分注意してください

県内では、果樹（ナシ、カキ、リンゴ、ブドウなど）の果実を吸汁加害するカメムシ類にチャバネアオカメムシ、クサギカメムシなどがおり、これらカメムシ類による被害果の発生が大きな問題となります。

チャバネアオカメムシは、雑木林などの落葉の下などにおいて成虫で越冬し、春先からはサクラやクワなどの実を餌として移動しますが、餌が足りないときなどに果樹類にも飛来して幼果などを吸汁加害します。しかし、6月下旬頃から、本来の主要な餌であり産卵場所となるヒノキやスギなどの球果が成熟すると、そこに移動して産卵します。ふ化した幼虫はヒノキやスギの球果を餌として成長し、7月～9月頃にかけて誕生する成虫も餌が豊富であればそこにとどまっていますが、成虫の量が多すぎたり、球果の量が少なかったりすると餌を求めて果樹園等へ移動してきます。

県病害虫防除所から病害虫発生予察注意報 第2号が発表（令和4年5月27日）されました。

これは、①本年2月中旬に県内42地点で行ったチャバネアオカメムシ成虫の越冬調査において、越冬数（本年2.7頭、平年2.2頭）と平年並～やや多く、越冬地点率（本年67%、平年40%）とやや高かったこと、また、②5月下旬の笠間市におけるサクラ果実での生息数が平年より多かったこと、③5月下旬の県内ナシ調査圃場の被害果率（本年0.03%、平年0.01%）と平年よりやや多く、発生地点率（本年10%、平年1%）と高かったこと、さらに、④5月5半旬までのかすみがうら市における予察灯へのチャバネアオカメムシ誘殺数が平年より多く、誘殺時期がやや早いことから、

果樹を加害するチャバネアオカメムシの多発生が予測されます！

果樹園内への飛来に注意して下さい！と呼びかけています。

本来の餌が足りなくなった場合、越冬した成虫が餌を求めて果樹園へ飛来したり、7月以降には新成虫が果樹園へ飛来して果実を吸汁加害する恐れがあります。常に園内を注意深く観察し、カメムシの侵入を確認したら早急に防除に努めてください。

<防除上の注意点>

1. 多目的防災網（6mm目または9mmクロス目以下）を展張することで、カメムシ類の侵入抑制、被害軽減が図られます。
2. カメムシの活動は夜温が高いと活発となりますので、その翌朝に園内をよく観察し、飛来を確認したら活動が鈍い早朝（又は飛来の多い夕刻）に薬剤散布を行ってください。
3. 各薬剤とも直接虫体にかかれば殺虫効果は高く、効果の持続期間がネオニコチノイド系、合成ピレスロイド系の薬剤で5～10日程度、有機リン系薬剤で2～3日程度とされています。
4. ピレスロイド系薬剤は、カメムシ類への防除効果が高いですが、天敵類に及ぼす影響も大きく、ハダニ類やカイガラムシ類の多発生を招く場合があるため、十分な注意が必要です。
5. 防除薬剤は、果実の収穫前日数（有袋や無袋で異なる場合があります）に注意して選択し、系統の異なる薬剤でローテーション防除してください。なお、散布の際は、園の周囲に飛散（ドリフト）しないよう十分な注意が必要です。

表1 果樹カメムシ類の主な防除薬剤

（令和4年5月31日現在）

薬剤名	系統名	分類 (IRAC)	ナシ	カキ	リンゴ	ブドウ
スタークル顆粒水溶剤	ネオニコチノイド系	4 A	○	○	○	○
アクタラ顆粒水溶剤			○	○	○	
ダントツ水溶剤			○	○	○	○
バリアード顆粒水和剤			○		○	
MR. ジョーカー水和剤	合成ピレスロイド系	3 A	○	○	○	
アグロスリン水和剤			○	○		
テルスターフロアブル			○	○	○	
ロディー水和剤			○	○	○	
スミチオン水和剤40	有機リン系	1 B	○	○	○※	
キラップフロアブル	フェニルピラゾール系	2 B		○	○	

注) 1. ブドウでは、果粉溶脱や汚れの恐れがあるため、農薬ラベルの使用法及び注意事項等をよく確認して下さい。

2. ※印のスミチオン水和剤40は、リンゴ（旭種とその近縁種）で薬害が発生する恐れがあります。

3. 分類欄には、IRACコードを記載しました。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 NEWS は JA 全農いばらき ホームページでもご覧になれます。